

「環境共生空間及びスピリチュアリティの観点を取り入れた 高齢者ケアと地域福祉のありかたに関する研究」

広井 良典、清水 忠男、緒方 泰子 (千葉大学)、安藤 聡彦 (埼玉大学)
池本 美香 (日本総研)、工藤 由貴子 (国際長寿センター)、多田 千尋 (芸術教育研究所)
黒須 正明 (社会福祉法人清心会)、新田 淳子 (オンザトップケアデザイン研究所)
服部 洋一 (東日本国際大学)、石井 秀樹 (東京大学)、村上 朝子 (フリージャーナリスト)

<要 旨>

医療・福祉分野におけるこれまでの様々なケアは、基本において特定病因論的な理解をベースに置く医療モデルをひとつの中心にすえた形で展開し、また高齢者ケアの領域等において唱えられ近年浸透してきたいわゆる生活モデルも、一定の枠組みを前提とするものにとどまり、ケアのもつ全体的なポテンシャルを引き出すには必ずしも至っていない。一方、現代社会における様々なストレスや自然からの隔離、伝統的な文化の喪失、身体性の希薄化といった状況を考えれば、コミュニティや自然との関わり、スピリチュアリティといった、より包括的な視点からケアをとらえなおすことが必須の作業となっている。

本調査研究では、(a) コミュニティ (b) 自然 (c) スピリチュアリティがもつ意味に着目し、概念的な枠組みの整理、これらの要素を取り入れたケアについての事例の収集・整理を通じ、高齢者ケアと地域福祉についての新たなケアモデルの検討を行った。

その結果、事例に共通してみられた特徴は、①豊かな自然と、文化的歴史的な背景をケアに取り入れ、地域独自のケアを展開、②ケアという新しい利用形態が、魅力のある空間の再生に寄与している、③空間の管理運営のために、多様な背景を持つ多世代の人々をケア領域に引き込むんでいる、④文化的自然の多様さが、参加者に様々な役割分担を促し、多様な関係性の構築に寄与している、等である。

事例検討を通じ、今後、地域における様々な緑地や自然、神社やお寺などの宗教的空間を、社会資源として活用していくことの可能性が示唆され、日本の風土にみあう、地域に根ざしたケアのあり方、全人的なケアの観点からのスピリチュアリティについてのさらなる検討が必要であるものと考えられた。

<キーワード>

ケア、コミュニティ、自然、環境、スピリチュアリティ

【はじめに】

医療・福祉分野におけるこれまでの様々なケアは、基本において特定病因論的な理解（ここでは、病いを個体内部の物理化学的なプロセスとして理解し、特定の原因物質を同定し除去することが疾病の治癒につながるという考えをさす）をベースに置く医療モデルをひとつの中心にすえた形で展開し、また高齢者ケアの領域等において唱えられ近年浸透してきたいわゆる生活モデルも、一定の枠組みを前提とするものにとどまり、ケアのもつ全体的なポテンシャルを引き出すには必ずしも至っていない。

一方、現代社会における様々なストレスや、自然からの隔離、伝統的なものからの隔離、身体性の希薄化といった状況を考えれば、コミュニティや自然との関わり、スピリチュアリティといった、より包括的な視点からケアをとらえ

なおすことが必須の作業となっている。

本調査研究は、構成メンバーがこれまで行ってきた『老人と子ども』統合ケア』及び「自然との関わりを通じたケア」に関する調査研究の蓄積（参考文献 12）、13）参照）を踏まえつつ、特にケアにとって、(a) コミュニティ、(b) 自然、(c) スピリチュアリティがもつ意味及びその相互関係に着目し、1) こうした主題を考えていく際の概念的な枠組みの整理、2) これらの要素（の全部ないし一部）を取り入れたケアの具体的事例についての事例収集・整理やケース・スタディ、3) 以上を踏まえた新たなケアモデルについての提案や課題の整理、等を行うものである。

I. 概念的枠組みの整理

調査研究を進めるにあたっての仮説的な準拠枠として、(図1)のようなモデルを想定してみたい。すなわち、人間という存在をめぐる様々な次元を考えた場合、「個人」(としての人間)という次元のベースには「コミュニティ(共同体)」という次元があり、その基底には「自然」という次元がある。さらにここでは、その根底をなす次元として、さしあたり「スピリチュアリティ」の次元と呼びうるような、生と死を超えた次元が存在するものとする。

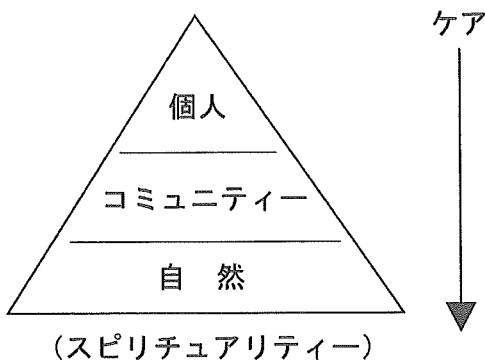


図1：概念的モデル
「個人・コミュニティ・自然・スピリチュアリティの関係」

以上のうち、「個人—コミュニティ(共同体)—自然」の諸次元については、比較的その意味が明瞭であると思われるが、「スピリチュアリティ」については必ずしも定まった定義や位置づけがされているわけではない。この場合、キリスト教や仏教などの高次宗教においては、こうした「スピリチュアリティ」の次元は、「永遠」といった概念とともに抽象化・理念化された形で想定されるが、日本を含め各地域・文化圏におけるもっとも伝統的な自然観においては、むしろこうした「スピリチュアリティ」は「自然」と一体のものとして(たとえば多神教的な自然信仰として)存在することが一般的である。ここではそれを「自然のスピリチュアリティ」という概念としてとらえてみたい(「自然のスピリチュアリティ」という概念について詳しくは「付論」参照)。

一方、「ケア」という営みのもつ本質的な意味を考えてみると、ケアということの中心的な意味は、たとえば「ケアする者—ケアされる者」といった“1対1関係”に限定・完結されるものではなく、「個人」という存在を、「コミュニティ」と、ひいてはその底にある「自然」、ひいては「スピリチュアリティ」に“つなげて”いき、そのことを通じて、個人の存在の中にこれらの諸次元を回復させる、という点にあるので

はないかと考えられる(再び図1参照。なお、ケアという営みのもつ意味についての考察として参考文献14)参照)。

このように考えていくと、ケアということが今後もちうる新しいかたちないしモデルとして、以上に述べた「コミュニティ(共同体)」、「自然」、「スピリチュアリティ」という諸要素の一部ないし全部を、ケアの実践の中に様々な形で融合させた姿を想定しうる。こうした問題意識を踏まえ、本調査研究においては、「医療・福祉」—「環境・自然」—「スピリチュアリティ・宗教」という、通常は相互に十分関連性が意識されていない3つの領域(の一部ないし総て)を相互に結びつけるような、先駆的かつ興味深い実践事例を収集・整理し、その意義や今後の展望を考察することとした。

無論これまでも、医療機関や福祉施設の現場において宗教的要素や、環境や自然の要素を取り入れてきた事例は数多くある。代表的な例として、前者にはホスピスがあり、後者には園芸療法がある。しかし、これらは、医療福祉関係者が、治療を目標とする問題意識の中から、どちらかといえば内発的に提起されたものである。地域との連携があったとしても、それは強力なリーダーシップに支えられ、関係者の努力を通じてインフォーマルに形成されたものであり、十分な選択肢もなく、地域との連携は一般に期待できるものではない。それゆえに、今後増加するより小規模で多様な医療福祉機関や、在宅ケアを視野に入れる時、強力なリーダーシップや、リスクとコストの集中を強いることには構造的な限界があり、そのことが自然や宗教的な要素をケアの中に導入することを阻む一つの壁になると考えられる。

そこで本研究では改めて緑地(農地・里山等)や、神社・仏閣等、全国に広く存在する空間を、「社会資源」として認識し、ケアに融合させる方策を見出したい。例えば里山は、エネルギー革命以降、薪炭林としての役割を失い、管理放棄が深刻な問題であり、現在新しい利用形態が模索されている。同じくお寺などの宗教的空間も、数百年にわたり、先祖供養の場として、また共同体の中心として空間を提供してきたが、社会構造の変化によって生活から切り離され、現代における宗教の持つ意味や役割が問い直されている。この意味で、いわゆる治療だけを目的とするような狭い意味でのケアに終始するのではなく、環境や宗教の問題を一部では解決するものとして、新しい空間の利用形態としてケアを捕らえなおし、積極的にそれらの空間をケアに結びつける上での課題を明らかにしたい。

II. 「医療・福祉」—「環境・自然」—「スピリチュアリティ・宗教」の要素を取り入れた具体的事例

事例①：プレイセンター・ピカソ（東京都）における神社を舞台にした地域保育

プレイセンターは、ニュージーランドで1940年代に親たちによる協働保育活動として始まった。1948年「ニュージーランド・プレイセンター連盟」が発足し、親の教育や設備などに関するガイドラインが設けられた。特徴は、子どもの自発的な遊びと、教育者としての親の重要性に注目した自主保育システムであり、「先生ではなく、親によって運営されている」点にある。

日本においては、2000年に「日本プレイセンター協会」が発足し、スーパーバイザー養成コースが実施され、講座の修了者が中心となって地域でのプレイセンター活動が行われている。①子どもにとっては、様々な遊びの中から、子どもが自ら選んで遊べるような環境が整えられており、異年齢の子どもたちが一緒に、自由に遊ぶことができる②親達にとっては、センターの運営や学習コースへの参加を通じて、親としてのスキルや自信、多様な文化への配慮、経営管理やグループ運営のスキルなどを得ることができるといった効果が期待される。

プレイセンター・ピカソは東京の国分寺市に、2002年9月より養成講座の修了者が中心となって活動を開始した。発足当時は主に小平市と国分寺市からの13家族、16人の子ども達とその親が参加、現在は26家族となっている。公民館などの市の施設は制約が多く、望ましい活動には不向きだったという事情から、地元の方たちを通じ、国分寺神明宮の敷地内にある地域の自治会の集会所を会場として借りて始められた。

この神社は住宅地の中に位置するが、周囲には畑が点在している。子どもたちは朝になると自転車や車、ベビーカーなどで親に連れられ、入り口にある鳥居をくぐってやってくる。境内には草むらや小さな森があり、子どもたちはここで木の実を拾ったり、季節の花や虫たちにふれることができる。境内で探検遊びをしたり、隣接した公園や四十畳もある集会所の広い部屋で遊んだり、安全で自然に恵まれた場ですごしている。

ピカソの運営にはスーパーバイザーがサポートはするが、参加するすべての親たちが協力し、準備・片付け、遊びの企画、必要な物品の購入

など分担しての「協働運営」が行われる。活動には年配の男性も参加され、子育て中の親子のみでなく、先輩の世代が経験を伝える多世代の交流の場としても広がりを見せている。集会所の管理を行う地元の人々とは、大掃除の手伝いなどを通じて関わりを深め、ピカソは地域の中での活動として育ちつつあるといえる。

「子どもは大人をしあわせにする存在」。子どものための「場」づくりを通じて、親自身、大人自身が育ち、地域の中の人々が結びついていく。地域の神社という身近な空間で行われているプレイセンターの活動は、コミュニティの広がり新たな可能性を示唆していると考えられた。

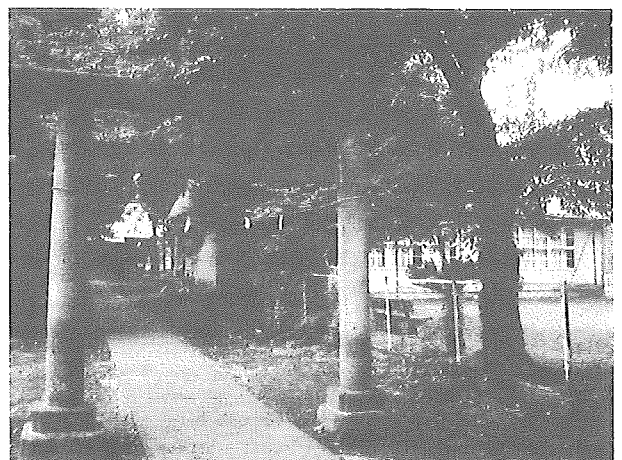


写真1：国分寺神明宮の鳥居と社務所



写真2：社務所内での触れ合い

事例②：見沼田んぼ福祉農園（埼玉県）での「農」を活用したコミュニティーケア

「見沼田んぼ福祉農園」は、埼玉県内東南部の8つの福祉団体と、農作業を主とした環境学習を子どもたちと共に行う「見沼風の学校」が活動している。平日は、身障者が就労形態の一つとして農作業を行い、収穫物の販売もふくめて活動している。見沼風の学校は、障害児者を含む農園の若手ボランティアが組織する団体であり、週末の農作業の傍ら、福祉団体だけではやりきれない農園の環境整備や、イベント（収穫祭・サバイバルキャンプ・コンサート・年越し・お月見他）の企画・運営なども担っている。季節のイベントやアドバイスを含む農園ボランティアを含めると総勢200名を超える人が、この農園で出会い、活動している。

農園の代表である猪瀬良一氏の「障害者が農業をするならば、地理的にも不便で、法的規制も多く、土作りも難しい見沼よりも、街中で眠っている畑を使えばよいのだ。しかし見沼の豊かな環境と広大な景色が、多様な人を集め、土地の歴史を発掘しながら環境保全を行うことを通じて、農園は野菜だけではなく、人も育てているとも思う」は、「農」がもつ多面的な機能を存分に活用し、全人的なケアがここで展開されていることを端的に示している。

見沼田んぼは1260haの広さを持つ巨大な農的緑地空間で、千代田区（1160ha）よりも広い。現在、学校等の公共施設も少なくないが、元は、低湿地で、江戸初期にせき止めた溜池「見沼」がその名の由来である。見沼は、漁場として、また農業用水を確保する場として利用されたが、江戸から20kmと近く、日光へ続く御成街道沿いであって人口増加が激しく、吉宗の時代に見沼を干拓し新田開発がおこなわれた（1728年）。日本三大農業用水の一つである見沼代用水は、溜池「見沼」に代わる用水として利根川から引水、多くの河岸が整備され、見沼産の米が江戸に運ばれた。福祉農園近辺には「武蔵一ノ宮・氷川女体神社」に代表される大小様々の神社・仏閣、「見沼通船掘」（世界初の閘門式運河）、「木曾呂の富士塚」（関東で最古のものの一つ）等の歴史的な遺構や建造物が多く、農的な営みの中に信仰が垣間見える歴史的な地区である。また明治末期の文部省唱歌「山田の案山子」は、広大な見沼田圃に佇む案山子を歌ったものである。

戦前まで江戸時代後期とそれほど変わらぬ農的な営みと風景を保った見沼田んぼも、戦後は徐々に開発が進んだ。しかし、1957年の狩野川台風では見沼田んぼの水没により埼玉県川口市以南の甚大な洪水被害が軽減され、その貯水機能が注目された。以降見沼の一部を農地として保全することで、貯水機能を発揮させる土地利用指針が出され、その規制を根拠として、昭和40年頃の風景を見沼の南部で残すことができた。減反政策後は、日本一の緑化資材の生産地として見沼の農業は経済的にも生き残ってきたが、近年農家の高齢化による放棄耕作地の増加、不法投棄や治安悪化を受け、農地として保全するのが難しい土地を埼玉県が公有地化した（16ha）。その農地の管理運営委託の契約を結び、1999年5月に見沼田んぼ福祉農園が開園した。

防災機能の維持や環境保全の視点が、結果として園芸療法の間を提供し、福祉に縁の無い人も農園を訪ね、福祉に対する理解を深める機会となっている。また福祉に携わる人にとっては、ボランティアの確保や、知的刺激を受けるため、相乗効果が生まれている。特に、農園を支える様々な知恵は、周囲の農家や、近隣で環境保全活動（田んぼ、里山管理、カヌーなど）をする人によるところが大きい。広く、生活に関わる福祉の視点が導入されることで、縦割りになりがちな個別の環境保全団体を結びつけ、薪や竹などの物質的循環も含めて、新しい関係性を築くに福祉農園は貢献している。園芸療法が、地域の自然環境や農業との関係性を持ちながらコミュニティが持つ「ケア力」を引き出すモデルとして、見沼田んぼ福祉農園が示唆するものは多い。



写真3：畑作業の後のひと時。ギターに、バケツに紙を張ったドラムで、バンドが始まった。

事例③：法然院（京都）を舞台とする環境教育 や芸術を通じた地域交流

京都盆地の東部に連なる東山三十六峰の一つ、善気山(大文字山)を境内とするお寺が法然院である。シイやカシ等の照葉樹林をはじめ、スギ・ムク・エノキ・ツバキが点在し、リス、タヌキ、イノシシ、キツネ、ムササビが出現する豊かな自然を育てている。浄土宗の開祖である法然がこの地に庵を結び念仏三昧をしたのは13世紀初頭のこと、それを偲んで1680年に本堂が立てられたのが現在ある法然院の歴史の始まりである。当初は、修行寺院の性格が強かったが、明治以降檀家各屋の葬儀や先祖供養を行うことによって伽藍の運営維持を図っており（現在の檀家数はおよそ600）、多様な活動の前提となる経済的基盤がある。

現在法然院では、年間100以上の催しが開かれており、いわゆる宗教活動の場としてだけでなく、社会的役割を離れた個人の出会いの場、アーティストを育む空間、地域活動の拠点として、法然院には多様な人が集まっている。「お寺は地域に開かれた共同体でなければならない」として、先代の住職であり哲学者でもあった橋本峰雄住職は、長らく物置であった建物を改装して講堂とし「現代風俗研究会」を開いたのは1977年だった。当時は、今ほどの催しが行われていたわけではないが、1984年に59歳の若さで亡くなった先代住職の後を受けて、27歳若さで寺を引き継いだのは現在の貫主、梶田真章住職である。

はじめは「法然院森の教室」を法然院の豊かな自然環境を用いて展開した。一般には、まだ環境意識が低い時代、法然院や大文字山で自然観察指導員として活躍していた近隣在住の久山喜久雄さんとの出会いがあった。梶田住職ご自身も、環境問題を考える多くの市民グループに積極的に参加する過程で、次第に科学者、アーティスト等との交流が増え、自然な形で寺をコンサート、古典、シンポジウムの場として活用してゆく機会が増えていった。月一回の講演会を主としたイベントから、世代を超えて自然を継承してゆく年間プログラムをもつ「森の子クラブ」を創設(1989年)し、環境学習活動の拠点施設として、ギャラリー・ワーキングルーム・事務室を備える「共生き堂（法然院森のセンター）」を1993年に開設するなど恒常的な活動に深化させていった。共生き堂の建造は、法然院が行い、その管理運営は一般市民に任されている。本堂は、秋の紅葉がきれいな時期には、3

年先まで予約が入り、お布施は利用者の懐具合にゆだねられている。

環境問題を契機に梶田住職の人柄と法然院の活動が京都に広がったが、今後は、コンサートや展示会を織り交ぜながらも、僧侶として法然の教えをきちんと伝えてゆくことの重要性を意識している。梶田住職による法然上人の教えは、「この世は、生き難い社会であるかもしれない。浄土はあの世しかなく、最終的な安らぎは現世では得られないかもしれないが、この世なりの安心感をどのように見出すかが大切だ。人には善人も悪人もなく、どんな人間であっても容易に悪人にも善人にもなりうる。例えば、人殺しを犯した人間は、社会の一つの反映であって、その人だけの責任ではない。人と人が支えあい生きてゆくことを尊重する仏教の縁起の考え方を抛り所として、現代の様々な考え方を持っている人たちとお付き合いしてゆくこと、それがサンガ（仲間）の考え方であり、その一つの核になるのが法然院の役目であるのではないでしょうか。」

歴史的にお寺が先祖の供養と葬式の場を提供することに特化し、これまで先祖供養を通じて得られてきた心の安寧が、急速に失われた今日、本来仏教者として何が大切であるのか？を問いながら、檀家との関係を枠を超えて、広くお寺に関わる人と、どのようなお付き合いが可能であるのかという実践と模索がある。決してありがたい法話の押し付けではなく、心地よい空間に集う人々とのコラボレーションを通じて、現代に引き継がれてきたお寺を開放するこの試みは、人と人、地域を結びつける広い意味でのケアモデルとして学ぶところが大きい。

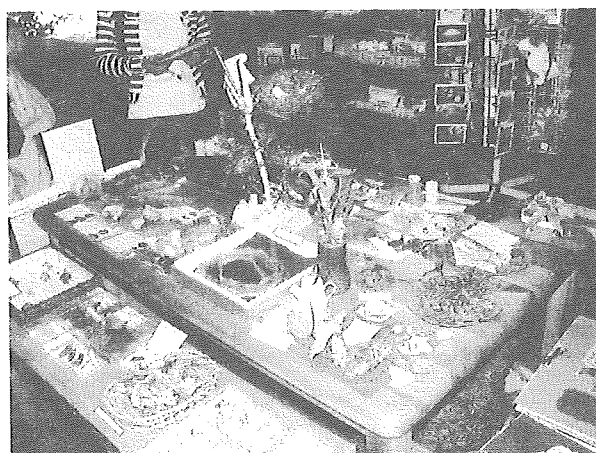


写真4：共生き堂（法然院森のセンター）の展示物
大文字山の自然と触れ合う、観光客も多い。

事例④：NPO ちんじゅの森（東京都）による コミュニティーが支えるケアの模索

古来日本人が自然とともに生活の場として、また信仰の場として親しんだ神社や、鎮守の森が持つ、知恵や文化を掘り起こし、それを広く普及啓発する事を通じて、少子高齢化時代の、地域活性化や福祉活動に貢献することを目的に「NPO ちんじゅの森」は、2001年に設立された。「ちんじゅ」とカナで記すのは、宗教的な空間である神社の森のみならず、現代において都市に散在するどんな小さな緑でも、人間を育み、関係性を形成する源泉になるとの考えから、生活に一番近い身近な森を「ちんじゅの森」と再定義して、人と人、人と自然を繋ぐ場として、その意義や役割を模索し、活用する意図がある。その活動は以下のように多岐にわたる。

A) 地域に伝わる民話を発掘して創作民話の形で現代に演劇として蘇らせて公演する活動

「Team 励風」の若手役者とスタッフが全国各地の公民館、小学校、高齢者施設などで公演。地域に眠っている伝説・伝承、その土地に実際に暮らした人々の物語を紐解き、取材を重ね、書き下ろす「オリジナル民話」の制作・上演にも取り組んでいる。都内では、神明氷川神社、東京大神宮、靖国神社、石神井氷川神社、日比谷公園などで実績があり、新しいコミュニティ拠点づくりを目指すNPOとして、地域の方々の意見交換・子供たちとの交流イベントも積極的に取り組んでいる。

B) 100年後の森づくりを目指したチャリティーコンサート

明治神宮の森は、数百年も前からあたかも、そこに存在したかの様な見事な人工林であるが、80数年を経て、東京の気候風土にあった極相林を形成しつつある。その森をお手本として第二の「明治神宮の森」をつくるためチャリティーコンサートを開始。2004年は4回目を迎える。過去の出演者には、原田真二、松田聖子、BEGIN、押尾コータロー、おおたか静流、Char等である（敬称略）。

C) コミュニティーが支えるホスピス活動の拠点施設のあり方に関する研究

甲府の在宅ホスピス医、内藤いづみ医師との共同研究。一般市民、各種医療機関・診療所へのアンケート調査、施設視察、ヒアリング調査を実施。また、コミュニティー支援活動家へのヒアリング、海外の学会視察（アジアホスピス学会、ヨーロッパホスピス学会）を行った。

専門家や分断化が進む高度現代医療や福祉に対する問題意識のもと、「森」と「ホスピス」を、「いのち」を育む場という、共通認識を拠り所にしながら、終末期を迎える人と、その家族、地域社会を結びつなぐことは、総合病院や大学病院では担いきれない領域をコミュニティーが補完するものとして、今後の展開が期待される。この調査研究において明らかにしたことは、①「いのち」の教育の場の不足、②「いのち」を支えあい看取することをテーマに、病院と地域の町医者や医療施設、行政と住民等をつなぎ、学びあう場の形成をコーディネートする組織、③人と人、人と自然を結びつける媒介者の役割の重要性であった。

NPO ちんじゅの森は、コミュニティーが支える地域医療ネットワークの形成をめざす媒介者として、調査研究を今後も継続しながら、一方で演劇やコンサート等も組み合わせる地域活性化をする様々な計画を温めている。A)やB)はイベントの形態をとるものの、決して一過的ではなく、地域に眠る民話を詳細な調査を踏まえて蘇らせたり、森林育成という未来への志があるように、きわめて持続的な活動であり、C)の調査研究で明らかにした課題を、還元してゆく、一つの手段や実践であると考えられる。

Ⅲ. 新たなケアモデルに関する課題整理・展望

これら4事例の調査、比較、検討した結果、共通してみられた特徴として以下が挙げられる。

- ① 豊かな自然環境と、文化的、歴史的な背景を利用して、地域独自のケアを展開している。
 - ② 潜在的に魅力のある空間がケアへの応用を通じて再生し、空間の維持管理にケアが貢献している。またケアのための新しい空間を、無から作りこむ必要が無く、経済的な効果が少なくない。
 - ③ 空間の維持管理は、多様な人や知恵を前提に成立し、課題が多いが、そのことが逆に、（従来のケアの領域外の）多様な背景を持つ多世代の人をケアの場面に導くことに寄与している。
 - ④ 文化的自然の多様さが、参加者に様々な形での役割分担を促し、多様な関係性の構築に成功している。また、地域の理解と協力を得る不断の努力が、ネットワークの維持に必要な不可欠である。
- 等の点があげられた。

事例検討を通じ、今後、地域における様々な自然環境や宗教的空間を、「社会資源」として位置づけ、それらを活用していくことは、医療機関や福祉施設内部だけでは期待できない様々な出合いや、楽しみを広く提供し、厚みのある全人的なケアが展開できる可能性が示唆される。また地域固有のケアのあり方、日本の風土に即した、全人的なケアの観点から、スピリチュアリティについてのさらなる検討が必要であるものと考えられた。

以上のような事例の整理・分析を基礎としつつ、「医療・福祉」—「環境・自然」—「スピリチュアリティ・宗教」の要素ないし領域融合させた新しいケアモデルの可能性について、「鎮守の森・お寺・福祉環境ネットワーク」ないし「福祉・環境・スピリチュアリティ・ネットワーク」(仮)の形成を通じて、今後さらに考察を深め発展させていきたいと考えている。

神社やお寺という、高度成長期には周辺に追いやられていた社会資源のもつ意義を再評価し、それを保育などのケア、世代間交流、環境学習の場などに活用していく方向での様々な試みやネットワークづくりが考えられる。

全国にあるお寺の数は約8万6千、神社の数は約8万1千ということであるが、これは平均して中学校(約1万)区にそれぞれ8つずつという相当の数である。考えてみれば、祭りや様々な年中行事からもわかるように、昔の日本では地域や共同体の中心に神社やお寺があった。

“日本人は宗教心が薄い”というような見方は、戦後の高度成長期に言われるようになったことであり、実際のところは、これほどの数の“宗教施設(ないし空間)”が全国にくまなく分布している国はむしろ珍しい。戦後、急速な都市への人口移動と、共同体の解体の中、そして経済成長への邁進の中で、そうした存在は人々の意識の中心から外れていったのである。

ここで注目すべき点のひとつは、日本の神社やお寺と「自然」の結びつきである。たとえばキリスト教の教会は、その「人為」的な建築に特徴があり、尖塔が天を目指すように立っているなど、「自然」とのつながりは本質的な要素ではない。ところが神社の場合は、鎮守の森という言葉が象徴するように、森や木々の存在が不可欠なものとなっている(神社のことをさす「杜(もり)」と「森」とは語源が同じというである)。これは、(宮崎駿監督の映画などとも通ずるが、)自然の中に「神々」あるいは「スピリチュアル」なものを見出してきた日本人の生命観・宇宙観をよく示している。日本の寺院も木々や山との結びつきが強いが、これは(インドや中

国の)お寺の原型からむしろ日本的に変容した面があるのではないだろうか。

なお、キリスト教などでも「生者と死者の共同体」という言葉があるように、神社などの空間は、そこにある森や自然とともに、生と死をこえて人々がそこに帰っていくような場所として意識されていた。神社やお寺がかつて共同体の中心にあったように、コミュニティないし共同体というものは、「死」という次元を含んで始めて、完結した意味をもつのではないかと思われる。

現在、このような神社やお寺という貴重な“社会資源”を、福祉や環境学習などに広く活用していこうという動きが各地で始まろうとしている。既に事例でも触れたように、たとえば東京の国分寺市にある「プレイセンター・ピカソ」では、神社の境内と社務所を使った、地域の人々による保育の試みが行われており、京都の法然院では、お寺を広く地域に開かれたものにするという理念のもと、自然や環境学習の場として積極的な活動が行われている。今後、こうした活動の交流や、知見の交換の場として「鎮守の森・お寺・福祉環境ネットワーク」といったものを作っていくことが考えられるのではないだろうか。または、より広く、「医療・福祉」—「環境・自然」—「スピリチュアリティ・宗教」という、通常相互の交流があまり行われていない領域をつなぐものとして、「福祉・環境・スピリチュアリティ・ネットワーク (WES ネット: Welfare, Environment (Ecology) and Spirituality Network)」とも呼ぶべきネットワークないし組織の可能性を検討していればと考えている。その具体的な課題としてさしあたり、

- ① ケアの応用を視野に入れた社会資源としての宗教的空間や、緑地の創出、および顕在化。
- ② 人材育成と交流。情報収集と提供。
- ③ 高齢者ケア、ホスピスケアなどとの連携、プログラム構築・提案
- ④ 取り組みへの経済的支援のあり方、地域への経済波及効果の検討
- ⑤ 法律面での課題の検討、政策提案等を視野にいれている。

【付論】「自然のスピリチュアリティ」について
本論で述べた「自然のスピリチュアリティ」
という考えについて補足しておきたい。

議論の整理上、死生観というもののあり方
との関連から述べると、日本人にとっての死生
観は、ごく大まかにとらえ返すと次のような3
つの層が指摘できるのではないかと考えられる
(日本人とひとまず記すが、究極的には以下に
述べることは日本に限らない、より普遍的な意
味をもっていると思われる)。

第一の層は、もっとも基底にある次元で、
「原・神道的」(ないし汎神論的)な層とも
呼びうるものである。これは「自然」の様々な
事物・事象の中に、たんなる物理的な存在を超
えた、あるいは生と死を超えた何かを見出すよ
うな感覚ないし死生観をさしている。山や木や
風や川等々に“八百万(やおよろず)の神様”
を感じ取る感覚でもあり、そこには同時に「死」
が含まれている(あるいは、古事記等に出てく
る「常世(とこよ)」「根の国」といった他界観
であり、そこでは「死」がこの世界のどこかに
存在する場所として具体的にイメージされてい
る)。こうした死生観ないし世界観をここでは
「自然のスピリチュアリティ」という言葉で表
現してみたい。

第二の層は、「仏教的(あるいはキリスト教)
的な層」であり、これは仏教伝来とともに伝わ
り、第一の層の上に築かれるような形で浸透し
ていったものである。キリスト教もそうである
が、これら言語化され体系化された高次宗教の
死生観においては、「死」は“永遠(の生命)”、
“涅槃”といった概念とともに、抽象化・理念
化された形でイメージされる。

第三の層は、戦後とくに高度成長期に支配的
になった死生観で、端的に言えば「死は無であ
る」という死生観である。“唯物論的”という表

現も使えるかもしれないが、個人の意識や存在
を物理化学的な事象として理解し、そうした見
方を“科学的”にとらえるような考え方の枠組
みである。この第三の層が、高度成長期以降の
日本人にとって圧倒的な力をもったことはあら
ためて言うまでもない。

以上、死生観の3つの層ということを簡潔に
述べたが、この3つは互いにどういう関係ある
いは「構造」にあるのだろうか。それは、ある
意味で「死」及び(生と死を超えた存在として
の)「神(神々)」というものが、人々から遠ざ
かっていったプロセスではなかったかと思われ
る。すなわち、第一の層においては、「死」や
「神々」は自然の中の具体的な事象とともに存
在するものとして身近に感覚されていた。生と
死は連続していて、一体のものだったともいえ
る。第二の層においては、そうした「死」や「神」
は抽象化・理念化された概念となり、いわば人
間にとって“無限遠点”に遠ざけられ、「生と死」
は明確に区分されたものとして二極化される。
最後に第三の層においては、そのようにして理
念化・抽象化された「死」及び「神(神々)」が、
端的に“存在しない”ものとされる。

こうした意味で、「死の抽象化・無化」と「神
(神々)の抽象化・無化」は、パラレルな出来
事といえるのではないだろうか。そして、私た
ち現代人あるいは現代の日本人にとって重要な
のは、特に戦後の高度成長期に次々と脇に追い
やられ忘れられていった第一・第二の層を、も
う一度再発見し、そことのつながりを回復し、
何らかの着地点を見出していくことではないか。

本調査研究で示された様々な諸事例のもつ意
義は、スピリチュアリティという点との関連で
いえば、以上のような文脈においてもとらえる
ことができるのではないかと考えられる。

	【特質】	【死の理解・イメージ】	【生と死の関係】
A. “原・神道的”(汎神論的)な層	自然のスピリチュアリティ	「常世」「根の国」など cf.「桜ロード」 ・・・具象性	生と死の連続性/一体性
B. “仏教(キリスト教)的”な層	現世否定と 解脱・救済への志向	浄土、極楽、涅槃など(仏教) 永遠の生命(キリスト教) ・・・抽象化/理念化	生と死の二極化
C. “唯物論的”な層	「科学的」ないし 「近代的」な理解	死=「無」という理解	生=「有」 死=「無」

表：日本人の死生観における3つの層とスピリチュアリティ

参考文献

- 1) 浅野房世・三宅祥介 『安らぎと緑の公園
づくり～ヒーリング・ランドスケープとホ
スピタリティ』鹿島出版会、1999年
- 2) 進士五十八監修 『園芸福祉をはじめる』
創森社、2004年
- 3) 松尾英輔 『園芸療法を探る（増補版）』
グリーン情報、2003年
- 4) ダイアン・レルフ編 『しあわせをよぶ園芸
社会学』マルモ出版、1998年
- 5) 上原巖『森林療法序説』林業改良普及双書、
2003年
- 6) 法然院森のセンター『大文字山を歩こう』
ナカニシヤ出版、2003年
- 7) フィールドソサエティー『森の子クラブ
10周年記念誌』1999年
- 8) 上田紀行『がんばれ仏教』NHKブックス、
2004年
- 9) 内藤いづみ『あなたを家で看取りたい』
ビジネス社、2003年
- 10) 上田正明、上田篤編集『鎮守の森は甦る—
社叢学事始』思文閣出版、2001年
- 11) 上田正明『身近な森の歩き方・鎮守の森
探訪ガイド』文英堂、2003年
- 12) 池本美香『失われる子育ての時間』勁草
書房、2003年
- 11) 多田千尋『遊びが育てる世代間交流』
黎明書房、2002年
- 12) 広井良典編『「老人と子ども」統合ケア』
中央法規、2000年
- 13) 国際長寿センター『自然との関わりを通じ
たケア——〈福祉と環境〉の統合に関する
調査研究』、2000年
- 14) 広井良典『ケア学』医学書院、2000年

参考ホームページ

「プレイセンター・ピカソ」

http://www.geocities.jp/pica_beans/index.html

「見沼たんぼ福祉農園」

<http://homepage2.nifty.com/minumafarm/>

「見沼・風の学校」

<http://www.h4.dion.ne.jp/~minukaze/>

「法然院」

<http://www.honen-in.jp/INDEX.html>

「NPO ちんじゅの森」

<http://www.chinju-no-mori.or.jp/index.html>

研究助成

実践的研究

